

◎展覧会前に、「大きいものが欲しい」「上に下に デコボコ飾りたい」「水彩もいい」注文があったが、「むむむ チョイ 困った注文」と思っていた。3号：27×22cm：A4 ぐらい、これの自転車の絵をたくさん持って行き、横4枚縦3枚をカタマリにして飾ろう、30号：91×91cmの2枚つないだもの、20号：73×73cmの2枚つないだもの、大きいものをいくつか並べ、6号、10号を間にまばらに飾るのでいいのでは、少し多すぎるけどと思いながら搬入の3日前ぐらいから積み込み始めた。

◎約束の9時ころ、Café&Gallery 黒川に到着。小早さんが外で待っていてくれた。バックオーライで車をうしろ向きに止めた。黄袋に入った絵たちを順次降ろし、中に入れて黄袋から出し壁に並べていった。「デコボコはどう・・・?」「あかん センターぞろえ」大きな声ともに現れたのがスーちゃん。「まずは 壁に並べて見よう」スーちゃんは嵯峨美出身の方、ここの美術顧問かな、てきぱき指示を出していく。今回の展覧会は、おまかせ部分が多く、案内状も作ってくれたプリントアウトが100枚ほどある。

◎ここでおレの大失敗。なんと吊り下げ用の金具を忘れた。その金具を半月前にホームセンターに探しにいった。「20, 30本ぐらい 強い 簡単 安い・・・」と探し回りいいものを見つけた。その金具を絵の裏側上部にネジで止め、上に空いている穴に釘で壁に固定していく、よしこれがいいと買った。1個30円ぐらいだったか、それも持ってくるのを忘れた。実を言うと1年前の前の時も二つの絵を繋ぐ棒を持って行くのを忘れた。この棒も何日も前からのノコギリで切って用意していたのを積み忘れた。「ええい ひとつずつ 神業で それぞれ吊って 壁で合体させよう」と吊りだした。「もう1センチ もう5ミリ」と何度か釘を打ち直し 考えているより簡単に上手く合体が成功した。

◎ここ川西市黒川の人口を調べると、世帯数が25、人口が75人だそうだ。その75人のほとんどの方がお茶を飲みに来られる、アットホームな村である。200年前の民家建築の横に、元あった倉を改装新築されたのが今回の画廊である。オーナーは越してきてまだ10年足らずながらすっかり75の方がたと仲良くなられている、都会では考えられないアットホームな交流である。

◎オーナーの息子君がグラフィックデザイナーながらサーフィン好きが高じて、波が最高の種子島で住み趣味と仕事をこなしているらしい。今はネットの時代なのか、回線さえあれば何処にいても、直接会わなくても仕事が進む時代だと痛感。

◎種子島：鉄砲伝来しか知らなかったが、宇宙センターがありロケットの打ち上げで有名だと知らされた。最近ではサーファーも移住してきていると書いてある。驚いたのは旧石器時代の遺跡があるとか。35000年前の遺跡があるとか。

◎旧石器時代：氷河期、海水面が下がリユーラシア大陸と日本列島が陸続きであった。大陸から大型獣がやって来て、当時の人々はそれらを追って狩猟生活をしていた。北からはマンモス、ヘラジカ、南からはナウマンゾウやオオツノジカが移動してきた。動物たちが移動するのにつれ、人類もそれらを追って移住してきたと書いてある。現代より7.8度温度が低い、人類は近辺をうろうろする動物を殺して食べる、木の実、果実を食べる。狩った獣の毛皮を着て寒さをしのぐ。火をおこし動物の肉を焼いたり暖を取ったりの移住生活。ゴリラやチンパンジーよりは少し進化した移住生活だったのかなと想像するねえ。

◎オレにとって出勤初日、展覧会は二日目だが。朝10時過ぎ車で出発。ガソリンを満タンにした6000円也。本格的な雨が降る、ガソリンスタンドでも屋根のない部分を歩くと頭が濡れるというぐらいの雨だった。箕面の山に近づいた時、指を上げる人影が、「おお よっしゃ とめたる のせたる」見るとペアの外人、「ほえやー?」「カツオジ」乗れと手招き、女性が雨、男性が後ろに乗った。「ほえやー? かんとりー」「べるぎ」「おお わんだふる」「つう ういーく」「ちょこ びやあ」「おお」「くま?」「のお くま ばっと まんきー」なんと通じるものである。絵の展覧会で運んでいるとも伝えた。勝尾寺の前で二人を降ろし画廊に入ると、子ども連れの家族。黒人とのハーフの子どもが3人、ぎょろ目でアフロヘヤーが極可愛い。二人の母は日本語と外国語でまくしたてる。一人はケニア人、一人はアメリカ軍人らしい。

- ◎2 回目の出勤日、GW の真っ最中である。天気は快晴、「さあ出かけるぞ」と車で進み始め家からすぐに車が進まない。「あれれ 今日は道路が混んでるね」と思いつつなかなか進まない。「まさか 家から歩いて5分とかからない所 えええ 渋滞」である。普段混んでいても、中央環状線まで自転車で行くのと同じぐらい時間がかかることはしょっちゅうであるが、なかなか中央環状線まで進まない、着かない。大阪じゅうの車が道路に出ているのではと思いつつ、「弁天さん まわりで行けばよかった 吹田万博が混んでいるのかも」といつもの道を避け、山田村を抜け勝尾寺に向かった。主要なところを外れいつもは車がまばらなところに来て、こんな田舎道でも車が多い。12 時前につけるはずが1 時近くになった。1 時前に友人達を妙見口駅に迎えに行くと約束していたので画廊に行く前に、先に妙見口駅に向かった。
- ◎写っている写真を数えると 11 人の同級生の友人達がやって来てくれた。コロナ前は毎年やっていたシエスタの展覧会も 1000 円パーティの時には皆さん来てくれていた。今日もゆっくり2 時間ほどワイワイ話し合っ、「おお また 飲もうぜ」「また会おう」なんてことで2 台の車に分乗して帰った。
- ◎4 時前に、山仲間の方たち 5 人が、「今 駅 迎えに来て」というのでまた迎えに行って画廊にとって返した。ここは Café & Gallery なので、「なにを メシ上がります」「ええと コーヒーと・・・」「ビールもあるよ」「えじゃ ビールと ケーキ」皆さん 4 時間ほど山を歩いて来た熱気で美味そうにビールを飲み干していた。
- ◎この展覧会は正味 10 日間あり、半分の 5 日の出勤と前もって決め文章に書いた。初日の御前中だけ雨が降ったが、うまい具合に雨をすり抜け、雨の無い日の出勤日が続いている。あと 2 日出勤するのだが予報では晴れのようなのである。
- ◎山仲間のひろみさんが 3 回も仲間を連れて来てくれる。これも上手いこと雨の日がない、「もう つかれるわ」といいながら 3 回とも妙見山に登り花の話をされありがたいことである。女の方は花が好き、花の匂を求めて登っている方が多い。花の名前に詳しく、お気に入りの花が咲く山を探し求めて歩いておられる。男のオレも、山肌に色の花があればそりゃあ楽しいうれしいが、無ければ無いでそれもまた楽しい。この季節は、ツツジ、シャクナゲ、カタクリ、その他いろいろあるらしいが、オレも先日来おおいに山の花を楽しんだ。
- ◎昨日はオレより 10 歳ばかり若い男性が二人来てくれた。まず扉の外からじっとオレを見る男、「だれかな・・・お 三木さん」彼とは 2 月の雪山で会って今日が 2 回目なので、ぼんやりしていた。もうひとり高校の後輩で、茨木に住む内藤先生。この二人を見ていると、10 歳若いとまだまだエネルギーに溢れている、若々しいと感じた。オレが大峰奥駈道を縦走したのが 67 歳の時だったと思い出す。
- ◎三木さんは朝から妙見山を歩いてこちらに来てくれたらしい、体力的に余裕のある顔つきで永らく居てくれた。ひろみさんやノンちゃんとかつて賑やかに登っていた仲間らしく、今回もひろみさんと久しぶりに会って楽しそうだった。
- ◎内藤さんは、Café & Gallery 黒川のスタッフである美香さんと話が弾み、秋にここで展覧会をすることに決まった。オレを含めこの 3 人は、六稜同窓生である。そのあと彼は、「ちょっと 歩いてきます」と出かけ、妙見山まで行ってきたらしい。
- ◎ひろみさんが仲間の 3 人を連れてきてくれた。今回の方々は、「ちょっと年配の方」だそうだがオレと、「また ヤマ 行こね」と話が弾む。
- ◎展覧会も残すところあと何日か、オレの出勤日は 2 日。絵が売れない、動かない、これはいささかの外れで残念である。もう絵の時代じゃないのか、日本人は絵画に金を出さなくなったのか、お互い老人で絵に興味が無いのか、いろいろ考えさせられる。「ネットだぜ」「外人だぜ」声が聞こえてきそうだけれど、ちょっとでいいから売り上げが欲しいねえ。「えかきが 金を 欲しいなんて 言うな」というけれど、動きがとれないよ。

◎今日は4組の方が、「行くぞ」と前もって連絡があった。

◎12時にCafé&Gallery黒川に入ると何人かの方がニコニコ迎えてくれた。「みんな知らない人だけどここにこ・・・」話し出して半年前のBBQで会った方だとわかった。BBQではお神酒が入り10人ぐらいの方がた楽しくワイワイ話していたが半年経ってすっかり忘れていて、「ええとどこかであった顔だれだったかどなただったか」頭を回転させながらニコニコ話すうちBBQの話が出て、「おうそうそうあの時お会いした方」と納得する。皆さんは前もって、「BBQで会った絵かきの展覧会ですよ」と情報をお持ちで、「あの時の方ですよ」と紹介されている。「そらあずっこい」とは言えないよね。

◎鈴木さん：すぐそばのテーブルに座っていた方、この方もニコニコ、「鈴木です」と言われて、「えおくさんは」「すぐ入ってきます」とすぐにわかった。今回の会場スタッフの皆さん、展覧会をしてくれる作家を探しておられる、「鈴木さん日本画のえかき常時作品在庫はあり家が近所条件はいいですよ」と申しあげ、Café&Gallery黒川の方も、「こらあいい」ということで1.2年以内に展覧会をされるやも。

◎川上さん：「車で何分ぐらい?」「30分ぐらいかな」彼は吹田の山田に住まいし、高校の美術の先生をしていた。今は猪名川の方に別荘風の建物を持ち彫刻作品製作所でもある。小ぶりに作品は売れそうな作品なので、画商もついている。Café&Gallery黒川の方に、「先ほどの方同様作品はあるいつでもできる」と紹介した。ただこの会場が彫刻作品を置くには設備が無い、狭いので触れて落としてしまう危険がある、諸々条件揃うかな。おみやげもいただいた。息子さんは川上亮さんで、売れっ子の映像作家である。

◎衣川さん：「3時に終わって歩いて30分ぐらいで行ける」と言っていたが、「遠い暑い40分かかった」と入ってきた。光風台診療所の先生をしている。「こーひー?飲めないえビールあるの?それ」枝豆とビールでチビリ。そう彼はグレーと黒のハットを被って入ってきた。「岡村さん帽子気に入らんのがあるからあげる」先日、会った時に帽子を2個もらった。オレは頭がデカイ、帽子に関しては子ども時代から困ってきた、60センチの帽子はなかなかなかった。お洒落に被ってみようといくつか試してみたが、今は登山の時に被るものを常用している。ここ何年か帽子は必要に迫られている、というのは、寒い季節は耳を隠さないと頭痛が起こるということでニット帽は離せない。普段の季節は頭の毛が少ない、上の方は禿に近い、ということで防寒と防護で帽子は必要である。もらったのは今の季節用の黒いハットと夏用お洒落ライトグレー、なかなか俺には似合っている。

◎布施君：「うわわ遠い高速降りて迷ったわからなかったえらい田舎」と大きな声で言う。18歳からの付き合い、八尾のりっぱな家の子、天王寺の美術館でデッサンの勉強をしていた。若いころはろうけつ染の工房を立ち上げ、家内工業ながら大きくやっていたと思ったが、晩年はタクシーの運転手をしていたらしい。「お前の運転なんかこわあて乗れん」と常に大口をたたき、梅田の桜橋交差点を根城にしていたとかで、黒川も一度客を乗せて来たことがあるらしい。「なんでナビ入れん」「わかってると思った」オレもひと月前、「黒川何処」不安ながらもナビに導かれていっぱつでここに来れた。それこそこんな田舎、ナビに頼らないと来れない。悪態をつきながら3号の自転車の絵を買ってくれた。

◎ひろみさんと山仲間：ひろみさんが「元・きっちゃん・八さんら3人を連れてきてくれた。」「わたし下見も含めてこれで4回おんなじルートで妙見山」とおっしゃるように、えらくがんばっていただき感謝ばかりである。それぞれ違うグループの方がた3人ぐらいを連れてきていただいた。70歳代になると、「たかが妙見山されど妙見山」低い簡単な山だけれど、登ってみると奥が深いのかも。

◎中島さん：高槻から来ていただいたが、午後に地元で用事があるとわかっていたので、「申し訳ないけれど会えないです」「いいよ」とおみやげを持参で来ていただいた。コーヒーが苦手な彼女が、「あのコーヒーは美味しかったずっと入っていった」と称賛される。味のわからないオレは、「?? そうですかオレも飲んだんですが」と笑って聞くだけ。帰りは急ぐので、「止々呂美ICから新名神に乗ると30分で帰れた」とおっしゃる。茨木も高槻も山手の方は妙見山と近いようだ、あらためて地図を見た。

- ◎さあ、今日は展覧会最終日、昼から晴れると聞きながらも小雨の降るなか出発した。12時に着けばいいが少し早く用意ができたので10時過ぎに出発した。Café&Gallery 黒川があるあたりは、お店がまったくないので弁当を持って行って食べている。今日も作った。弁当は慣れた山用、いつも作るモノである。
- ◎今日はケヤキを見ながら喰おうと足を延ばした。10分ぐらいで“野間の大けやき”の標識があり信号を曲がると駐車場がある。3度ぐらい来たことがあるが、「あ そうそう 駐車場があつて 事務所建物があつて・・・」と思い出した。あらためて見ると、「わわわ でかい 高さが30メートル 幹回りが14メートル 樹齢1000年以上・・・」である。ベンチに座ってケヤキを見ながら弁当をいただいた。
- ◎何年前か前、故中西さんと中国地方からの帰り路、休憩で立ち寄った時にアオバズクがいたので、彼とおあわて、「お こらあ撮らなあ」6x7の中盤カメラと一升瓶大のレンズを出して三脚に据え付けた。たくさんの方がカメラを構えていたが、「ごめんやっしゃ」と割り込んでシャッターを押している、フィルムを追加する、またまたシャッターを、「ええのん 撮れた」後日ニコニコ顔で話していた。アオバズク：青葉木兎：東南アジアから青葉が茂る5月ごろに日本に渡ってくるらしい。フクロウの仲間は小型哺乳類：ネズミなどを主食とするが、本種は昆虫が多いらしい。オレもこの時はしばらくじっと見ていたが、顔をぐるり時計回りに、その反対まわりにクルリ回転させる様子は、「へええ かいらし」である。
- ◎この2年ほど、箕面病院への絵の配達に箕面の山を通りかよっている。今回のCafé&Gallery 黒川もここが一番早いとかよっているが、箕面の山はサイクリングヤロウが多い。こんな坂道をよく頑張る、皆さん必死に漕いでいる、また下りの坂道は車が追い付けないぐらいのスピードで走っている、50キロ60キロは軽く出ているのでは。オレは自転車が悪手、まず上り坂はヒーヒー言っておき、降りて押ししてしまう。下り坂は怖くてペダルが踏めない、常にブレーキをかけている、これではだめである。自転車ヤロウはさておき、今日は、走っているやつが多い。いわゆるランというモノで、2人3人のチームをいくつか見た。山の中もランの方々が多くなって、倍のスピードで去っていく。最近の流行だね。
- ◎11時半ごろに画廊に入った。まだ多少雨が残っている様子、珍しくお客がいない。今回の展覧会は小早、小林両様の付き合いの方がはっきりなしに現れ、お茶をケーキをおしゃべりを楽しんでおられる。オレが居ると多少絵の話にもなるが、絵の話が終わると皆さんのおしゃべりは尽きることがない。
- ◎今回の絵、10年ぐらい前のモノ、多少売れる可能性のあるもの、水彩画、これらを持ってきて並べたが、近作の大きいもの、畳の大きさ、その半分ぐらいの大きさ、それらの近作がオレにとって一番輝いている。今が一番というのが、オレにとっても一番いい。
- ◎2枚あわせの絵：「これはですね 運ぶのに楽 収納するのに楽」こういえばみなさん、「そうやねえ いい方法ですねえ」とおっしゃる。オレは若いころから、小さいものを並べて一枚の絵にする、ということが好きだった。いつもそうしていたわけではないが、若いころから何枚かを組み合わせた絵をいくつか作ってきた。もちろん、運ぶ、収納する、こういうことにはすごく便利だけれど、本当はそれだけの理由じゃないのですよ、皆さんわかってください、といってもわからないわねえ。大きな絵を分割していく、ひとつひとつの間隔を開けていく、絵の空間と壁の空間が話し合いせめぎ合い、これはなかなか面白い対話になっていくのですよ。絵は四角の面積の中の、色の面積のせめぎ合い、絵とはただそれだけなんだけれど、そこに壁が加わると、もうひとつ奥が深くなっていくのですよ。
- ◎最終日は打ち上げパーティーと聞いていた。もしそうなれば、車で帰るかシラフで一泊するかと一応シラフは積んできたが、今日はそれが取りやめになったとかで、5時に終わって片づけ始めた。搬出は搬入に比べ時間は半分ですんでしまう。まず絵を壁から降ろし、黄袋に収納していく。全部の絵を戸口に立て掛ける。壁の金具やメモ類を剥がす、書き終わった芳名録やカタログなどをひとつにまとめる。さあ車を入り口まで運んできて積み込みだ。2時間足らずで作業が終わり、8時台には家に帰りついた。「今日は運動はヤンピ」である。会期中も河原での運動はずっと続けていた、年に一度のヤンピだった。

- ◎大御影山は知らなかった、「え 大谷山の ひとつ 京都より なのか」161 号線を走っていると、「ピラデスト今津 ここを左折」と出ている。すぐかと思ったら相当入っていく、相当登っていく、標高 500M のところにある家族村である。入村料 300 円/1 人で駐車場に止める。
- ◎登山口がすでに 500M、目的の大御影山は 950M、「今日は 簡単な 山かな」と思ったが終わってみると、ふり返ってみると、それなりに上り下りがあり言うほどは簡単ではなかった。
- ◎花をたくさん見られた、オオイワカガミ、シャクナゲ、カタクリ・・・などである。白っぽいピンクやら明るいバイオレット、花がわんさか咲いていた。花もいいが葉っぱがいい。オオイワカガミの葉は緑に黒に茶色にテラリ光っている、山の斜面に敷きつめたように広がっている。カタクリの葉っぱは緑の中に黒やら白の斑点、これまた花が無くても、「カタクリだ」と広がっている。「これは オオイワウチワ」どこがどう違うのかかわらないが、さかんに咲いている。
- ◎「あと一本で てっぺん」というところに林道が横切っている。同道の方が、かつてここまで車で来て上まで 1 時間で上がったことがあるとおっしゃる。ここまで車が来れるかどうか知らないが、車が走れそうな林道である。山の登って、上の方に道路があるのはがっかりする。「なんだ せっかく エンヤコラ 登ってきたのに 車道があるのか」である。そんなケチ臭いことに目くじら立てるなとこれを記しながら反省。ただこの道路、舗装がしていない砂利道だがどこからどう来ているのか・・・。
- ◎空は青いほとんど雲はないが快晴というよりなんだかボケた青空、黄砂かなと思いつつシャツ 2 枚で暑くもなく寒くもなく登っていく。はじめはスギの植林地帯、半分ぐらい登ったところから植林が無くなり雑木林地帯になってきた。季節は新緑の季節、あらゆる樹々の葉が若草色で萌えている。今日の登山は山の南斜面をまっすぐ登っていくような地形、南ということで地面は明るく乾いている、陽が照り影がさす、「この明るさは 南斜面 なんだ」と感じさせる。冬は北斜面を登ると雪が塊り凍り付きヒヤヒヤすることもあるがそれなりに楽しい。冬の南斜面は雪が融けぐずぐずの雪、足を雪の中に突っ込みぼそぼそ歩くこれもまたよし。雪のない季節の北斜面は薄暗くしっとりしている、その陰気な感じも嫌いではない。今日はずっと南斜面、陽の当たる道を堂々と歩く、気恥ずかしい輝きである。
- ◎緑色の話：同道の方が、「絵を描く時 緑色は難しい」とおっしゃる。山に来ると緑色がいっぱいである。もちろん麓にも緑色はいっぱいある。冬でも常緑樹の葉っぱの緑は白い雪の中にあってずっしり重い。今日の緑は勢を感じる若草色、緑色に黄色をいっぱい混ぜ、黄色っぽい緑色、毎日毎日新芽が噴き出るそんな季節かな。「絵の具は 外国製の透明水彩絵の具 混ぜても まぜても 色が作れない 塗ったら 濁って きたない」「先生は同じように 混ぜているが 色がきれい 難しい」とおっしゃる。「こんな 山の 緑色 何色の絵具を 混ぜたら・・・」「緑色と いったって 100 も 1000 もある 明るい時と 暗い時 緑色が違う そら あ 難しい」「あとは自分の 感性 信じなきゃ」
- ◎もう 15 分も歩けばてっぺんかなというあたり、ここらあたりはもう高島トレイルに乗ったのかな、なだらかというより平べったい土地の上の尾根道、それこそ樹が無ければ広い土地だという景観、ブナの木がはびこっている。ここらあたりのブナは若木の群れ、親分はいない、直径 50 センチぐらい中年の樹々たちだ。そんな樹々たちの枝々に若葉がぎっしり付いている。花もいっぱいありました。
- ◎1 時にてっぺん到着、「さあ 弁当にしましょう」真鍋・山上・岡本・難波・オレの 5 名、それぞれ地面に座って食べ始めた。コーヒー用の湯を沸かした。皆さんそれぞれ手作り弁当である。横を見ると反射板がある、人の声がするので見に行った。大谷山に向かうトレイル道と麓に下る道がある。樹が無い尾根道がある。
- ◎4：30 渡渉のあるところまで帰ってきた。前日降ったので一部泥だらけの登山道、この渡渉で靴を洗った。車に帰り着き着替え帰途についた。
- ◎順調に進んでいたが、安曇川付近で前の車が止まった。結局 1 時間半動かなかった。白髭神社付近の交通事故が原因だったようだ。大阪駅まで送り、10 時ころ帰宅。風呂とおかずと日本酒を楽しんだ。

山岸哲くオシドリは浮気をしないのか>

◎読み始めて、「人間と鳥は似ている 哺乳類よりも 似ている」というところから始まる。「なんのこっちゃ」と進むうちに、「なるほど」と納得した。

◎「鳥も人間も昼間に行動する 夜行性ではない」「おお そうやねえ たしかに」毎日行く安威川河川敷には動物はたくさんいるが、「いつもいるモノ いつも見られるモノ」これは鳥だ。野生の動物はめったに遭遇しない。彼らは夜行性なのか、人を嫌って隠れているのか、なかなか見つけれられない。水の流れには魚はいる、きれいな流れのところだと見えるが、地面と水の中では世界が違う、お互い見合うというのではない。蛇やカエルも見かけるのは年に数回しかない。昆虫はたくさんいるが小さすぎて人間と似ているとは言いがたい。そのてん鳥は年中河原のあちこちにいる。人間とは多少の距離は取っているが姿はまる見え、なにをしているかもまるわかり、向こうもこちらをちらりと見ているだろうが無関心である。

◎人間の子どもは未発達で生まれてくる。未発達という言葉に違和感があるが、海亀は孵化して生まれるとすぐに自分の力で親もなしに海に向かい泳ぎ始める。馬や鹿は生まれてしばらくすると立ち上がり、母親の乳を飲み母親を追いかけて走る。

◎ヒトは哺乳類の中の鳥類か：ヒトが哺乳類の一員であるにもかかわらず、近代社会では、鳥のように一夫一妻の婚姻形態をとるのは大変興味深いことだ。ヒトはその祖先が森林から草原に進出して立ち上がった時に、日足歩行に適するように骨格が様々な変化を遂げた。そのひとつに、上半身の重みをささえる骨盤の結合と強化があげられる。そのため産道は狭くなり、ひどい難産を経験したことだろう。こうした状況の中では、異常に未熟な赤ん坊を早産するメスの方が生き残りやすかったに違いない。

スイスの生物学者 A・ポルトマン、「人間はどこまで動物か」によると、ヒトの赤ん坊は他の哺乳動物と比較して、著しく未発達の状態で生み出されてしまうという。未熟な赤ん坊を持った母親は当然活動が制約され、オスの食糧運びの協力が必要となる。ここに一夫一妻的な夫婦のきずなが生まれてきたものと想定される。すなわち、ヒトでも鳥類でも、子どもの養育にかかる手間が増大するのに伴って、夫婦で育児する一夫一妻制が発達してきたものと推察される。

しかし、未開社会では一夫一妻制はきわめて少ない。ヒトが出現したころは、一夫一妻だったとは思えない。ヒトの一夫一妻制は宗教的、倫理的側面が過分に絡んでいると見るべきである。

チンパンジーなどの霊長類は、一般的に父親の存在の意味は薄い。

◎1996 年以降、羽毛の痕跡を持つ恐竜化石が相次いで発見され、恐竜と鳥類が極めて近い関係であることが明らかになってきた。

◎鳥の祖先が恐竜だという学説はたった 30 年前ごろから言われだした。それまで鳥と恐竜はまったく無関係とオレは思っていた。それを聞いたのは 60 歳のころ、驚いたね。驚きついでに、天皇家というけれど継体以前の天皇の存在が怪しいこと、仁徳天皇もその存在が怪しいので仁徳天皇陵は、「大仙古墳」と呼ぶようにする、これを聞いたのも 60 歳のころ、驚いたね。

◎6600 万年前、恐竜の大量絶滅事件があった。この時点で地球上を闊歩していた恐竜が絶滅した。鳥類もヒト類と同様、いくつもの鳥類がいたが現世に残ったのは今の鳥類だけ。ヒトも現世に残ったのはホモサピエンスだけ。恐竜は絶滅しても、哺乳類も鳥類も何とか生き延びたのだねえ。

◎哺乳類と鳥類は恒温動物。恐竜は、変温動物と恒温動物の中間的存在なのか、まだ結論が出ていないらしい。

- ◎今日 5/20 : は万博に行ってきた。オレにとって万博といえば近所の万博公園だけれど、行ったのは大阪港の方で開かれているモノである。まず予約のややこしいこと、これには参った半日かかったとおおいにぼやく。
- ◎「大阪・関西万博」というのが正式名称なのかな。チケットの予約購入には、「大阪・関西万博 ID」を取得せよとのこと。かつての古き良き時代のように、現金をもって入り口窓口で切符を購入というわけにはいかないようだ。「メールアドレスをしろ」とくる、メールアドレスが無い人はアクセスもできないわけだ。次に、「パスワード を作って しろ」とくるが、「アルファベットの 大文字 小文字と 記号が 必要」という。よしわかったと早速始めたが、「メールアドレスか パスワードが違います」とメールで送ってくる、これが何度も続いた。どうもこれ等の作業は苦手である。ましてスマホの小さい画面では字を打ち間違えお話にならない。パソコン使用歴はいささか長い、ログイン作業は苦手である。なんとか切符がとれ入金もできたが、次にバスの予約がまた難関、全く情けない限りである。
- ◎ぼやきついでに驚いたのが自動販売機。水を買おうとしてコインを入れかけたが、コインが入らない、というよりコインを入れる穴が塞がれているではないか。万博の中は全部キャッシュレス決済だそうだ、「えええ」である。中の食堂も売店も、「バカ高いよ」と聞いていたので前もっておにぎりやらサンドイッチを用意していた。お茶も山に行く時同様にペットボトルに詰めていた。入り口で荷物検査があり、「その水 ひと口 飲んでみて ください」と来たもんだ、これには驚いたが、テロのことを考えると至極ごもっともである。
- ◎西九条から JR 夢咲線という路線は初めて乗った。ユニバーサルジャパンへ行く人はこの電車を利用するようだ。昔ぐったり疲れ切った親子の群れを何組も見えてきた、日本人も外国人も親子で遊んでぐったりとこの線を使って帰って来て、西九条駅から乗り換えていた。万博会場は新しい埋め立て地の夢洲、舞洲に咲洲と三つの大きな島がある。
- ◎JR 夢咲線の桜島駅で降りシャトルバスに乗った。入場料が 4700 円、バス賃が 350 円である。バスはスイスイ走り TV でおなじみの巨大木道建造物が見えてきた。前評判で、「あんなちんけな 建物」「いつ 壊れるやら」と聞いていたが目の前でみると、「りっぱじゃねえか きれいだ すごい」とオレの評価である。万博のロゴも、「なんと劣悪な センスの無さは ばつぐんだ」とこれまた悪評、酷評だらけであったが、オレは、「一種の個性 アレはあれでいい」と言っていたし、今回、中に入っているいろんなところにアレンジされて使われているロゴの展開はなかなかいいと思う。
- ◎リングの上を歩いてみた。板張りのリングの上はコンクリート建造物と変わらないぐらいの堅牢さがあるのではと思わせる、ヒトが千人乗っても、万人乗ってもびくともしないのでは。リンクの上は幅が広く一部に花が植えられ白に黄に紫にと目を楽しませてくれる。クルリー周してみたかったが、時間切れであきらめた。ただ行っても行っても同じように先が見えないのは円周だからだろうね。10 分進んでも 20 分進んでも同じところにいるような錯覚を覚えた。
- ◎会場にはたくさんの人がいた、信じられないぐらいにたくさんの人がいた。そんな人たちが各国のパビリオンの前で並んでいる。70 分待ち、2 時間待ちと書かれているが、我がカミさん、「身障者入り口は」と係りの方に聞くと、「どうぞ」と案内してくれる。長蛇の列をしり目に目を伏せそっと案内された。立ったまま長時間列の中で立っている方々には申し訳ないが、障害者手帳のおかげでどこも並ばずに動けたことはありがたい。
- ◎イタリア館、中国館、カザフスタン館の 3 カ所を覗いた。万博は既設の美術館や博物館の中でじっくりモノに触れるという雰囲気ではなく、満員の観客がぞろぞろ進んで行く、その横に何かが展示されている。オレにとってすごい展示物はなかった。進んでいるうちに止まって椅子があったりなかったり、部屋全体の巨大スクリーンに映像が音楽が流れる。映像画面はすごい迫力である。
- ◎木造建造物が多かった。太い集成材を組み合わせ、各国とも館を造っていた。

◎九州旅行：22 日の夜の船便で 23 日の朝に別府港に到着。23 日は平治岳に登り阿蘇くじゅう高原ユースホテル（熊本県阿蘇郡南小国町満願寺）で寝る。24 日は雨の中、阿蘇の烏帽子岳に登り次に、中岳に向かうも入山禁止、中村邸（宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町鞍岡）で寝る。25 日は雨の中を久住山に登り中村邸で寝る。26 日は祖母山に登り中村邸で寝る。27 日は獺師山に登り別府港から夜の船で帰阪。28 日の朝 9 時前に帰宅。5 日間で 5 座の山旅でした。

◎だいが前から美香さん、「九州の山に 登りましょう 連れて行きますよ」と言われていたが、5 月早々の展覧会で頭がいっぱい、計画も準備もできていなかった。「一週間ぐらい行きましょう くじゅうもいい 韓国岳もいい 霧島もいい・・・」「ユースは 安くて楽しい・・・」どこに泊まって、どこに行って、話のあらすじがつかめない、「こらあ 困った おおよその行程 教えて」といったが返事が返ってこない。今回行ってみて、彼女の旅がどういうものか、説明ができないことがわかった。

◎ユースからナカムラ邸まで 70 キロを 70 分ぐらいで走って行く、大阪なら 70 キロも離れたところに行くには 2 時間 3 時間かかってしまうが、九州のこのあたりの道はまったく混んでいないスイスイ走れる、北海道なみに移動できる、しかもレンタカーの軽自動車は燃費がいい、走ってもはしってもガソリンは減らない、「おお九州の旅は こういうことか」と何日か経ってわかってきた。毎日往復 100 キロ 200 キロ走って移動した。

◎22 日 19：00 別府行きのフェリー：サンフラワーに乗っている。スクリューが回っている感じで船がグラツと揺れ出港したようだ。「お風呂に入って ビールにしましょう」美香さんと齋藤先生の 3 人である。何年か前、北海道に行く時に衣川さんにおごってもらった船旅で慣れた蚕棚のベッド、ロッカーに 60L のザックを収納し、早速風呂に入ってロビーに出た。「ここに座ろう」ソファを見つければビールとワインで乾杯。生ハム、チーズ、いくつかのアテが出てきて話が弾む。とはいえ、こんな感じで乾杯していた 10 年前とは弾みが違う、今はひっそりであるのがさびしい、ジジイだねえ。

◎別府港からバスで JR 別府駅まで行き、そこで、ガッツレンタカー（石松の名前）でスズキの軽自動車を借り荷物を積み込みスタートした。男池登山口駐車場まで車を走らせた。途中はさすがの温泉の町、硫黄の匂いがポカ〜り漂っている。

◎9：50 いよいよ歩きだした。男池登山口：860M すでに標高は高い。トイレ横に蛇口があるのでそこで 500ML3 本の水を調達した。口に含むとさすがに美味しく冷たい。天気は白っぽい雲り空で晴れてはいないが明るい。

◎驚いたのは湧水がすぐに川になる場所がそばにある、すくって飲んだ美味しい。「このきれいな川 上高地でも見たぞ」水のきれいさ豊富さ、これはすごいと拍手である。しばらくは高低差の無い登山道、雑木林の森、高い樹、低い樹、曲がりくねった樹。そばに樹の無い湿原が広がる、登山道というより土の遊歩道だ。

◎11：00 ソババツケ 1100M に到着。蕎麦を栽培していた場所らしくグラウンドぐらいの大きさの広場がある。そこで少し休んだが、出発する時に地図を確認しなかったの道間違いことになる。広場ゆえに三叉路を気付かなかった、立派な標識があるのに踏み跡をまっすぐ進んでしまった。事前に、平治岳は聞いていたが登山口の話が無かった、スマホに地図は入れていた、紙の地図も焼いていたが、登山口がわからなかったののでしっかり調べていなかったと反省である。

◎30 分ほど歩いた地点で、「おお 道 間違ってるぞ」ソババツケの三叉路、右に曲がるところをまっすぐ進んでしまった。「え ええい もうここまで来たら 少し先から 右に曲がって登ろう 破線の道だけど」12 時に標識を見つけ、「これを右だ 休憩して 昼なので 食べましょう」ザックからおにぎりやらサンドイッチやらを食べ水を飲んだ。

◎破線の道、「あああ こっち あっちだ」赤いリボンを探し、目印を探し、上り下り、オットト、といいながら進んだ。船の寝不足でなんだかフラリとする。「ちょい 休憩」起き上がって進んだ。

◎破線の道、スマホの地図、紙の地図、リボンの標識、1時間半ほどのロスながら来るべき道に合流できた。「あ花」紫がかったピンクの花、「お これだね 目的の花 ミヤマキリシマ」道の横に一本の木、ミヤマキリシマが咲いていた。この花は初めて見た、少し小ぶりなツツジだと思った。少し進むともう一本あった、そして右の方に目的の高み“平治岳”が見えその斜面にたくさんのミヤマキリシマが咲いていた。まだ三部から五部咲きだそうだが、壮観な花の斜面である。先ほどグラリとしたので少し休んでいたが元気を取り戻し登っていった、こんなフラリは初めてなのでびっくりしたが、だんだん元きになってきた。200Mはすぐに登れると二人を追いかけたが二人がすぐに降りてきた。時間切れで平治岳直下で撤退である。「この花が見られて 最高だ」という感想である。満開ではないというけれど、パステルトーンの紫と新緑の若葉が目飛び込んでくる。

◎4 時にソババツケまで帰ってきた。山に慣れない齋藤さんがばてている、コーヒータム、ボンベを出して湯を沸かしお菓子などを食べた。空は曇ってきた、雲が覆っている、明日は雨かもね。

◎5 : 20 車のところまで帰ってきた、7 時間ちょいの山行時間でした。車の近くに湧水がそのまま川になっているところがあり、そこのひしゃくで水を掬って飲みペットボトル 3 本にも注入、「めっちゃうまい ほんまにキレイ まったくの トーメー」である。

◎美香さんがユースに電話を入れると、「ゆっくり 風呂に 入って来て」ということで、七里田温泉というところに着いた。炭酸泉とかラムネ湯とかの表示、「ぬるいから ゆっくり 浸からねば」温泉なんてというオレも、「なんのこっちゃ」といささか興味をひかれたが、急ぐ旅なので九州にいる間も、風呂はササッとすませた。くじゅうの強炭酸泉は火山活動のそばにあり有名ならしい。

◎ユースに着いた、「おかえりなさい」何人かが笑顔で迎えてくれる。「部屋はこっち」「さ 飲んで 食べて」挨拶もそこそこに荷をベッドのそばに置き食堂に行った。アトリエに利用できそうな天井の高い部屋、まずはビールを飲み、いくつものおかずが出てきた。家族的にもてなされ料金やシステムがいまだ理解できないが、素泊まりで 5000 円？調理は自由にできるということかな。ただ美香さんが親しくつき合う先客の方と連絡を取り合って、我々の食べ物も造ってくれていたようである。店主の阿南さん（阿蘇の阿じゃなく阿保の阿：そらあないやろ）くじゅうの山を知り尽くし登山道の修理もされておられる方。絵を見せてもらったが中学生時代の絵が上手い、最近描かれた水彩も水みずしい森と川の絵、なかなかのものである。奥さんは信仰厚いクリスチャンのようだ。計画ではここに 2 泊の予定だが、「用事があるので 出て行って」と笑い話で 1 泊しか居なかった。「明日は 雨模様 阿蘇を散策しましょう」ということで寝た。

◎阿蘇くじゅう国立公園：山に登って見回すと広大な草原が広がっている、この景色は日本の他の地方では見られない。それは古代から 3 月ごろに野焼きをすることで保たれているそうだ。奈良の若草山の山焼きは知っているが、規模がその何倍もの面積の野焼きが行われている。想像するだけでケムイが壮観だろうね。この野焼き、縄文時代から続いているとも、とにかく自然に、空気に、いいことがあるのだろう。

◎ユースから阿蘇に向かった、50 キロ 1 時間足らずで阿蘇山上ターミナルの駐車場に到着。「烏帽子岳を登ろう」大きく時計回りにまわって 2 時間コース、雨具を着込み歩き始めた。火山の規模が大きすぎ、火口はどこかわからないが駐車場の前に大きな草原が広がり池があり、ぽつりぽつりと馬らしき動物の影が見える。同道の齋藤先生、「雨でも 登るよ 言われたから 慌て モンベルで 雨具を買った」からし色の上着を着ておられる。「小学生みたいでしょう」とおっしゃるが、さすがモンベルの上等雨具、洪いからし色である。

◎歩きだし 30 分ほど進むと、左側に大きな火口が遠くに見え湯気か煙が上がっている。先ほど写真で見た沸騰している池かもしれない、湯気がボコボコ上がっている地獄谷かも知れない。阿蘇は大噴火のカルデラの跡、全部がほら〜りまったりしている。まったりは九州の方には通じず関西弁かもね。

◎上に着くころには雨もやみ、てっぺんでパンやら菓子やらを食べ水を飲んだ。帰りは途中から草原の中に入り馬たちのそばを通った。馬たちはただ馬肉用かね・・・。ここは“草千里が浜”という。

- ◎そのあと、車で移動して噴火口を見ようと次の駐車場に車を止めた。古坊中（ふるぼちゅう）と看板がある。奈良時代から戦国時代までここは一大霊場、修験場で 36 坊 28 庵の建物があったそうだ。戦国時代、島津と大友の戦いに巻き込まれ僧侶や山伏たちが四散したらしい。
- ◎雨の中、火口を見ようと歩き出した。雨が降る、風がきつい、何人かの人たちが雨具を着込み歩いているが、途中で係りの人に、「今日は 立ち入り禁止」というので引き返した。コンクリートのセルターがいくつかあるので入ってみた。コンクリート厚は 60 センチぐらい、詰め込めば 100 人ぐらい入れるか、急な噴火が起こればこれは助かる。「いてて」頭を天井にゴツンと打ってこぶができた。
- ◎「今日から 泊めてもらえる 一日 早くなったけど」「泊めてもらうということで お友達の家に行くんだが 大丈夫かな・・・」美香さんの知人の家に泊めてもらうということだ。風呂とスーパーで食材を調達と進みだした。目的地まで 40 キロぐらい 1 時間足らずである。
- ◎風呂は、五ヶ瀬温泉木地屋という旅館の風呂に入った。風呂は明日にランの大会があるとかでスポーツ青年で満員であった。皆が出てくるのを待っていて、石碑を見ると山頭火の句がある。
- ★ 分け入っても 分け入っても 青い山
句は九州の山を歩いていて詠んだものらしい。今と違い道路は未舗装の狭いデコボコ道、そこに広がる草原を想像した。黒い僧衣に編み笠、首から袋をぶら下げ、まるメガネ・・・
- ★春の海 ひねもす のたり のたりかな
★今日も 事なし 凧に 酒 量るのみ
- ◎「きました」「おお ようこそ」ホンジュラス人かなと思っていたが精悍な白ヒゲの方、T・N さんである、大丈夫かなとの稀有は吹っ飛び家の中に入れていただいた。若いころから JICA でホンジュラスに在住、最近は毎年、九州に 3.4 か月住んでおられる。
- ◎机をひらってきたと食卓が並び食事の用意ができている。まずはビールとゴクリ、次いで日本酒が出た。鶏の煮込み、サラダ、酢の物が並び、スーパーで買った食材が並ぶ。向こうでは 1 キロ四方に人はいない、コロナにも罹らない、ひとりで楽しく暮らしている。最近河をせき止め石ころでダムを造っている、持てないようなでかい石も積む・・・地主に感謝される。「高さが 6M 幅が 20M ぐらいのモノを 1 年足らずで造れるかな」すごいスケール、石を積んで行く、想像もつかないが規模だけれど、楽しい作業だとおっしゃる。
- ◎「明日は 天気が良くないが 久住山にしよう」斎藤さんは明日夕方の新幹線で奈良に帰るという。「ここから熊本まで どう行けば」いろいろスマホで検索して、車で 30 分ぐらいの町から熊本行きのバスがある。斎藤さんは、「熊本に行ければ 一日 一人で 観光するよ」ということでバス停で別れた。朝すでに曇っている、ごはんをいただき軽自動車に 4 人乗って出発した。山は初日に登ったのと近いので、1 時間ほど車を走らせた。
- ◎雨が降る登山口の牧ノ戸峠 1333M で車を止めた。雨なのにたくさんの登山客が来ている。「ザザ降りになれば撤退かもね」と笑いながら 9 時に歩き始めた。歩きやすい道が続き石ゴロゴロ道が続く、雨で泥んこ、靴もズボンも汚れていく。肌色の違う外国人が半分を占め、たくさんの人が雨の中登っていく。2 本目あたりから樹林帯が終わり低木の新緑がきれいだった。きれいだということでは、雨に濡れて石も幹も葉も瑞々しい、景色は見えないが目の前のいろんなものの色が際立つ。
- ◎星生山との分岐のところを久住山の方に向かい、久住山避難小屋で休憩をとった。中は人だらけ、小さい小屋に 20 人ぐらいは居たろうか座っている立っている、雨具姿の若者が、韓国、台湾、中国、欧米、混ざりあってしばしの休憩である。
- ◎避難小屋から 150M ほど登ったところが、久住山 1780M のてっぺんだ。雨と風で冷たい、手袋が欲しいとポケットの手袋を出したが、雨に濡れて入らない。相変わらず景色はまったく見えないが大いに満足である。帰って久住山の写真を見ると、もう一度行かねばとも思う。